“経営の一員”としての「課長」のあり方

あしコミュニティ研究所　　浦　野　秀　一

行政は、組織で仕事をします。その組織の要（かなめ）が課長という職です。課長は、一般職の延長として存在するのではありません。それは“経営の一員”ということです。ですから、人・もの・金・情報をどのようにマネジメントしていくかといった自治体経営能力が問われるのです。

かつて行政は、「行政運営＝Ｐublic　Administration」 といわれてきましたが、今日では「行政経営＝Ｐublic　Management」といわれます。Administration というのは、「新しい物事を始めるにあたって、それを許可してもよいか検討する」というイミがあります。つまりいったんブレーキが掛かってしまいます。一方 Management というのは、「新しい物事をはじめるにあたって、それが成し遂げられる方向で考え・行動する」というイミがあります。つまりアクセルをかけるということです。若手職員からの前向きで論理に裏付けられた提案には、可能な限り寄り添う姿勢が求められます。

そして課長は、“人材育成”で評価される立場です。つまり、職場研修＝ＯＪＴの責任者ということです。仕事を通じて若手職員を指導し、次の世代のより良い行政の担い手を育成していくという責任があります。自分には人を育てる・指導する能力は無いという人がいますが、若手職員と“共に成長する”という姿勢があればいいのです。

職場は、仕事の場であると同時に社会人学習のステージでもあります。メンバー同士が共通の目標に向けて話し合う中から“新しい気づき”を発見していく場でもあります。そのような職場のことを“職場力のある職場”といいます。「あの課長の部下は、みんな生き生きしている」と言われる課長となることをめざしてください。

こう考えると、課長の仕事は実に多岐にわたりますが、さらに地方自治の重要な担い手の一翼である議会と対応していかなければなりません。委員会や本会議における答弁能力にも磨きをかけていくことが求められます。

かつて神奈川県三浦半島にある青年の家の館長（課長職）の話を聞いたことがあります。その方の趣味は盆栽づくりで、山に入り紅葉の若木を掘って来て、それを丁寧に丹念に慈しむ、そこから若者を育てる力を得たといっていました。

職場で・家庭で・地域で、皆さんが日ごろ行っている日常の行動・活動の全てが、より望ましい課長となるための栄養なのだと思ってください。

1946 年東京都生まれ

1969 年早稲田大学第一法学部卒業　埼玉県川口市役所へ入所
人事・議会・広報広聴・企画を歴任
1985 年～1988 年　㈶埼玉総合研究機構へ出向　主任研究員
1971 年　ネパール王国訪問　東洋的なまちづくの手法を学ぶ
1992 年　川口市役所退職
1988 年～2009 年　国土交通省　地域振興アドバイザー
（社）日本広報協会 広報アドバイザー
観光大使：北海道函館市、岩手県大船渡市、茨城県鹿嶋市、大分県竹田市